

|         |               |
|---------|---------------|
| メーカー    | Mercedes Benz |
| タイプ     | W201 190E     |
| 年式      | 1,989         |
| 全長(mm)  | 4,420         |
| 全幅(mm)  | 1,680         |
| 全高(mm)  | 1,390         |
| 重量(kg)  | 1,180         |
| エンジン    | 直列4気筒 SOHC    |
| 排気量(CC) | 1,995         |
| 馬力(hp)  | 115           |

1982年にメルセデス・ベンツ初のDセグメントとして発表され、後継のCクラスが登場する1993年まで12年に渡って生産されました。

車体の大きさは日本の5ナンバーサイズに収まりますが、上位モデル同様に質実剛健な設計がなされており、安全性能も見劣りしません。また新設計の足回りに加え、コスワースヘッドのエンジンを積んだモデルの投入やドイツツーリングカー選手権（DTM）参戦のためのホモロゲーションモデルの市販により、従来のメルセデス・ベンツにはないスポーティーな印象も与えました。

W201には「190」というモデル名が付与されたが、これはW201の登場以前に最小モデルであったW123に200が存在していたためです。

デザインはブルーノ・サッコが手がけ、1979年に登場したW126の印象を引き継ぐ四角いヘッドライトや横長で凹凸が付けられたテールライトを持ちます。しかしW201はW126以上に樹脂部品を多用しており、W123やW126に比べると当時の流行を反映してメッキパーツの割合は極めて減少しました。これらは質実剛健な印象を与えることになり、また軽量化や良好な空力特性の獲得に寄与し、Cd値は0.33と当時の4ドアセダンとしては優秀です。

メルセデス最小の車種として登場したW201ですが、中央に速度計を置き、右に回転計と時計を、左に燃料計・燃費計・水温計・油量計を配置した3連の計器の配置やギザギザが付けられたシフトゲートなど、その操作性や配置は上級車種と同様です。但し、左右非対称のメーターナセルがなだらかに傾斜してセンタークラスタまで伸びたデザインは当時は勿論、近年までメルセデスでは他に類を見ないものでした。

エンジンはフロントに縦置きされ、後輪を駆動するオーソドックスなものです。当初はガソリンエンジンもディーゼルエンジンも直列4気筒(M102、OM601)のみでした。

足回りはメルセデス初となる前：マクファーソン・ストラット、後：マルチリンク式サスペンションで、これらはW124など多くの車種に引き継がれています。

日本への正規輸入は1985年です。バブル期と相まって（並行車も含め）大量に輸入販売され、街に氾濫したことや排気量によってはメルセデス初の5ナンバーであることも相まって、BMW3シリーズ（E30系）の「六本木のカロラー」同様、「小ベンツ（こべんつ）」「赤坂のサニー」と揶揄されました。

本車両はメルセデス・ベンツの輸入権がヤナセの関係会社であるウエスタン自動車から現在の輸入元であるメルセデスベンツ・ジャパンに移管された当時に輸入車した車両です。

一部の補修を加えて動態保存されています。

【ヤナセ所有車両】